

論壇

続けることに大きな意義

通商交渉はしばしば自転車に例えられる。自転車は漕ぎ続けていなければ倒れてしまう。同じように、通商交渉はそれを続けることに大きな意義があるというのだ。通商交渉をやめてしまえば、そこから保護主義が広がっていく。そうした保護主義的な動きを抑えるためにも、通商交渉は重要であるというのだ。

この「自転車理論」について私が学術誌で読んだのは、もう40年近く前のことだ。現在のことに書いて書かれたものではない。それでも、最近のTPP（環太平洋連

伊藤 元重 学習院大教授(国際経済学)

携協定)の動きを見ていると、まさにこの自転車理論が当てはまっている。

日本はTPPの交渉に参加するのかがどうかで、国内で大きな議論があった。安倍政権になつてから、交渉への参加を決めた。それが日本の国益になると考えたからだ。そして厳しい交渉を続

ければ、TPPの求心力はなくなると。ただ、ここから日本が踏ん張る。

米国の動きが始まったのだ。当初はこれを冷やかに見る人もあったようだが、結果的には先日、ついに最終合意に向けてほぼ決着がいった。合意に最も慎重なカナ

TPP交渉という「自転車」

け、ようやく合意が成立しそうなどころまで到達した。ところが、トランプ新大統領は、選挙戦の公約通りにTPP交渉からの離脱を表明した。これでTPPの漂流が始まった。TPP参加国の中で圧倒的に大きな規模であり、交渉をリードしてきた米国が離脱

の首相が、ダボス会議でTPPの合意について触れたことが二ユースに流れていた。これは大きな成果である。面白いことに、このあたりから新たな展開が出てくる。トランプ大統領が、米国が再度交渉に参加する可能性を示唆したのだ。米国がTP

Pに参加することは、いろいろな面で米国の国益にかなうものであることは明らかだ。だから米国が交渉に参加することはおかしなことではない。ただ、あれだけ明確に離脱を表明したトランプ大統領が、その舌の根も乾かない時期に交渉参加の可能性に言及するというのは驚きだ。

英国も参加に興味示す

TPP11という交渉の自転車を漕ぎ続けたことが、次の動きを誘発した。ただ、せつかくまどめ上げたTPP11であるのに、そこに米国という新たな交渉者が入ってくることには問題もある。TPP11は、各国の利害を丁寧に調整した後のガラス細工のような存在だ。そこに米国という強力な交渉

者が入ってくると、せつかくまどめたものが壊れかねない。まずは、できるだけ早く11カ国での批准を済ませ、その上で米国との交渉に入るというのが好ましいステップであるように思える。

TPP11に関連してもう一つ興味深い動きがあった。英国がTPPに参加することに興味を持っているという報道があったことだ。英国はEUからの離脱を決めて、通商戦略の見直しを迫られている。英国との関係が深いオーストラリアやニュージーランドが参加し、また英国が経済連携交渉を進めていきたいと考えている日本が主導するTPPに英国が参加したいと考えても不思議ではない。今後の動きを見守りたい。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。